

本当に欲しいものは何か? : 分福茶釜と性能・機能



宮川 豊章
論説委員会委員
京都大学大学院・教授

大学の教員は近頃教育の質が問われる場面が多い。学生諸君への一方的な情報伝達とはならないように、講義中にはできるだけ声を掛けるようにしている。一見妙な質問をし、答えを聞いて話を続けることも多い。数人の俳優さんの名前を挙げてどれが好みであるか聞き、その胸の内を確かめるための恋文、さらに非破壊検査と話をつなげることもあれば、落語や昔話を枕にふることもある。

私自身は日本の昔話類は相当知っていると思自負している。しかし、わが子供たちに思いを致すと、さてどの程度知っているかどうかきわめて疑問である。今の学生諸君は、いわゆる御伽噺はあまり知らないように思う。名作物あるいはアルプスの少女などは知っているかもしれないが、日本の有名な話はあまり知らないのが現実のようである。

先日分福茶釜の話を知っているかどうか聞いたところ、知らないという学生がほとんどであった。あらすじを話した上で問いかけた。「普通の茶釜はたぶん鋳鉄でできている。しかし、分福茶釜で出てくる茶釜は狸が化けたものであるから、実は狸製である。さて、茶釜を狸で造っても良いのだろうか?」

私は、茶釜は狸製であってもかまわないと思っている。もちろん条件がある。その狸製の茶釜でお茶をうまく点てることができれば、という条件である。茶釜に要求される性能には広いものがある。風合い、手触り、重みなどもあるのであろう。しかし、最低限の性能は湯を沸かすことができるかどうかである。昔話では、炉に架けたところで手足が出、湯は沸かせなかった。最低の要求性能さえ満足しなかったのである。

土木施設、例えば橋でも同じだろう。橋はコンクリートでできていても鉄鋼でできていてもあるいは狸でできていてもいい。橋の機能として何を期待していて、工学的にはどのような性能を要求しているかが問題なのである。技術者にとっては、本当に欲しいものは、橋ではなくその機能であり、それを成り立たせている性能である。極論すれば、橋でなくてもいいのであろう。

ものづくりを本来の使命と思っている土木技術者は多い。しかし、社会基盤を造るだけが使命ではない。造りこなしただうえで、機能を果たすことができるように使いこなすことが必要である。したがって、土木技術者は市民生活に関わる有形無形の価値を市民に提供するサービス担当者として捉えるべきである、と思っている。単にものを提供す

るのではなく、それによって生まれる機能を提供して来たのである。

先日ある場で、わが国の主要な大都市において時間降雨量 5mm を越えると越流し悪臭を漂わせるような下水道が多い、と聞いた。市民が働き生活する都市を支えるための適切な機能が下水道には求められているはずである。下水道と名のつくものがあればそれでよいのではない。もしもこれが本当で、時間降雨量 5mm というようなきわめて低レベルの条件でも適切には機能を果たせない、言わば脆弱な機能しか有しない施設では、土木技術者としては満足なサービスを提供できてはいない、ということにはならないか?

医者と患者の間に「相互信頼」が無いと良い治療はできない、ということは医療事故等があった場合よく耳にする言葉である。都市という有機体の基盤を担当する土木技術者は、都市の本来のオーナーである市民にとっては言わば医者の立場にある。医者である土木技術者が、満足なサービスを提供しないとすれば、市民は土木技術者を信頼しないのではないか? これは決して下水施設のみを槍玉に挙げているわけではなく、わが国の土木施設はまだまだ貧弱な点が多いのである。

われわれ土木技術者は、土木施設の本来のオーナーである市民が何を要求しているのか、さらに市民はどのレベルのものを要求するべきなのか、を考えているはずである。われわれが欲しいものではなく、市民が欲しいものは何か? が重要なのである。ところが、市民は土木施設について詳細に知っているわけではない。土木技術というものは、単にものを作る技術ではなく、使いこなす技術をも含んでいることなどは先ず知ってはいないだろう。

サービスを提供するお客である市民への広報が当然必要なのである。ものがあふれすぎているから豊かではない、という言葉が聞く時代である。そのような現実の前で、丈夫で美しく長持ちする土木施設によって誇りを持って市民社会に提供できるサービスを描き、土木施設の重要な役割を何度も明確に説明することが必要である。その後初めて、市民は土木施設の重要性を確認し、市民から適切な情報を得ることができるだろう。

しかし私は気になる。茶釜は鋳鉄でできていなければならないと思ひ込むようなことを私はしてはいないか? 土木施設の役割・機能、本来要求されている性能を見てはいないのではないか? やはり、市民が真に要求すべきところを市民とともに語りあうべきである、と信じているところである。